

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

Ⓨ

# 国 語

(200点)  
(80分)

## 注 意 事 項

- 1 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
- 2 この問題冊子は、43 ページあります。問題は4問あり、第1問、第2問は「近代以降の文章」、第3問は「古文」、第4問は「漢文」の問題です。  
なお、大学が指定する特定分野のみを解答する場合でも、試験時間は80分です。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10
----

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答番号	解	答	欄
10	①	②	③ ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

- 5 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 6 不正行為について
  - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
  - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者がカードを用いて注意します。
  - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。





国

語

(解答番号)

1

}

38

(

## 第1問

次の文章は、香川雅信『江戸の妖怪革命』の序章の一部である。本文中でいう「本書」とはこの著作を指し、「近世」とは江戸時代にあたる。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に①～④の番号を付してある。(配点 50)

(2601—4)

① フィクションとしての妖怪、とりわけ娯楽の対象としての妖怪は、いかなる歴史的背景のもとで生まれてきたのか。

② 確かに、鬼や天狗など、古典的な妖怪を題材にした絵画や芸能は古くから存在した。しかし、妖怪が明らかにフィクションの世界に属する存在としてとらえられ、そのことによつてかえつておびただしい数の妖怪画や妖怪を題材とした文芸作品、大衆芸能が創作されていくのは、近世も中期に入つてからのことなのである。つまり、フィクションとしての妖怪という領域自体が歴史性を帯びたものである。

③ 妖怪はそもそも、日常的理解を超えた不可思議な現象に意味を与えようとするミン(ア)ゾク的な心意から生まれたものであった。人間はつねに、経験に裏打ちされた日常的な原因—結果の了解に基づいて目の前に生起する現象を認識し、未来を予見し、さまざまな行動を決定している。ところが時たま、そうした日常的な因果了解では説明のつかない現象に遭遇する。それは通常の認識や予見を無効化するため、人間の心に不安と恐怖を(イ)カンキする。このような言わば意味論的な危機に対して、それをなんとか意味の体系のなかに回収するために生み出された文化的装置が「妖怪」だった。それは人間が秩序ある意味世界のなかで生きていくうえで必要性から生み出されたものであり、それゆえに切実なりアリティをともなっていた。

A 民間伝承としての妖怪とは、そうした存在だったのである。

④ 妖怪が意味論的な危機から生み出されるものであるかぎり、そしてそれゆえにリアルティを帯びた存在であるかぎり、それをフィクションとして楽しむという感性は生まれえない。フィクションとしての妖怪という領域が成立するには、妖怪に対する認識が根本的に変容することが必要なのである。

5 妖怪に対する認識がどのように変容したのか。そしてそれは、いかなる歴史的背景から生じたのか。本書ではそのような問いに対する答えを、「妖怪娯楽」の具体的な事例を通して探っていこうと思う。

6 妖怪に対する認識の変容を記述し分析するうえで、本書ではフランスの哲学者ミシェル・フーコーの「アルケオロジ」の手法を(ウ)エンヨウすることにした。

7 アルケオロジとは、通常「考古学」と訳される言葉であるが、フーコーの言うアルケオロジは、思考や認識を可能にしていく知の枠組み——「エピステーメ」(ギリシャ語で「知の意味」)の変容として歴史を描き出す試みのことである。人間が事物のあいだにある秩序を認識し、それにしたがって思考する際に、われわれは決して認識に先立って「客観的に」存在する事物の秩序そのものに触れているわけではない。事物のあいだになんらかの関係性をうち立てるある一つの枠組みを通して、はじめて事物の秩序を認識することができるのである。この枠組みがエピステーメであり、しかもこれは時代とともに変容する。事物に対する認識や思考が、時間を(エ)ヘダてることで大きく変貌してしまうのだ。

8 フーコーは、十六世紀から近代にいたる西欧の「知」の変容について論じた『言葉と物』という著作において、このエピステーメの変容を、「物」「言葉」「記号」そして「人間」の関係性の再編成として描き出している。これらは人間が世界を認識するうえで重要な役割を果たす諸要素であるが、そのあいだにどのような関係性がうち立てられるかによって、「知」のあり方は大きく様変わりする。

9 本書では、このアルケオロジという方法を踏まえて、日本の妖怪観の変容について記述することにした。それは妖怪観の変容を「物」「言葉」「記号」「人間」の布置の再編成として記述する試みである。この方法は、同時代に存在する一見関係のないさまざまな文化事象を、同じ世界認識の平面上にあるものとしてとらえることを可能にする。これによって日本の妖怪観の変容を、大きな文化史の変動のなかで考えることができるだろう。

10 では、ここで本書の議論を先取りして、**B**アルケオロジ的方法によって再構成した日本の妖怪観の変容について簡単に述べておこう。

11 中世において、妖怪の出現は多くの場合「凶兆」として解釈された。それらは神仏をはじめとする神秘的存在からの「警告」であった。すなわち、妖怪は神霊からの「言葉」を伝えるものという意味で、一種の「記号」だったのである。これは妖怪にかぎったことではなく、あらゆる自然物がなんらかの意味を帯びた「記号」として存在していた。つまり、「物」は物そのものと言うよりも「記号」であったのである。これらの「記号」は所与のものとして存在しており、人間にできるのはその「記号」を「読み取る」こと、そしてその結果にしたがって神霊への働きかけをおこなうことだけだった。

12 「物」が同時に「言葉」を伝える「記号」である世界。こうした認識は、しかし近世において大きく変容する。「物」にまわりついた「言葉」や「記号」としての性質が剥ぎ取られ、はじめて「物」そのものとして人間の目の前にあらわれるようになるのである。ここに近世の自然認識や、西洋の博物学に相当する本草学(注)という学問が成立する。そして妖怪もまた博物学的な思考、あるいは嗜好しこうの対象となっていくのである。

13 この結果、「記号」の位置づけも変わってくる。かつて「記号」は所与のものとして存在し、人間はそれを「読み取る」ことしかできなかった。しかし、近世においては、「記号」は人間が約束事のなかで作り出すことができるものとなった。これは、「記号」が神霊の支配を逃れて、人間の完全なコントロール下に入ったことを意味する。こうした「記号」を、本書では「表象」と呼んでいる。人工的な記号、人間の支配下にあることがはつきりと刻印された記号、それが「表象」である。

14 「表象」は、意味を伝えるものであるよりも、むしろその形象性、視覚的側面が重要な役割を果たす「記号」である。妖怪は、伝承や説話といった「言葉」の世界、意味の世界から切り離され、名前や視覚的形象によって弁別される「表象」となっていた。それはまさに、現代で言うところの「キャラクター」であった。そしてキャラクターとなった妖怪は完全にリアリティを喪失し、フィクションな存在として人間の娯楽の題材へと化していった。妖怪は「表象」という人工物へと作り変えられたことによって、人間の手で自由自在にコントロールされるものとなったのである。こうした「妖怪の「表象」化」は、人間の支配力が世界のあらゆる局面、あらゆる「物」に及ぶようになったことの帰結である。かつて神霊が占めていたその位置を、いまや人間が占めるようになったのである。

15 ここまでが、近世後期——より具体的には十八世紀後半以降の都市における妖怪観である。だが、近代になると、こうした近世の妖怪観はふたたび編成しなおされることになる。「表象」として、リアリティの領域から切り離されてあった妖怪が、以前とは異なる形でリアリティのなかに回帰するのである。これは、近世は妖怪をリアルなものとして恐怖していた迷信の時代、近代はそれを合理的思考によって否定し去った啓蒙けいもうの時代、という一般的な認識とはまったく逆の形である。

16 「表象」という人工的な記号を成立させていたのは、「万物の霊長」とされた人間の力の絶対性であった。ところが近代になると、この「人間」そのものに根本的な懐疑が突きつけられるようになる。人間は「神経」の作用、「催眠術」の効果、「心靈」の感応によって容易に妖怪を「見てしまう」不安定な存在、「内面」というコントロール不可能な部分を抱えた存在として認識されるようになったのだ。かつて「表象」としてフィクショナルな領域に囲い込まれていた妖怪たちは、今度は「人間」そのものの内部に棲すみつくようになったのである。

17 そして、こうした認識とともに生み出されたのが、「私」という近代に特有の思想であった。謎めいた「内面」を抱え込んでしまったことで、「私」は私にとって「不気味なもの」となり、いっぽうで未知なる可能性を秘めた神秘的な存在となった。妖怪は、まさにこのような「私」を(オ)トウエイした存在としてあらわれるようになるのである。

18 以上がアルケオロジ的方法によって描き出した、妖怪観の変容のストーリーである。

(注) 本草学——もとは薬用になる動植物などを研究する中国由来の学問で、江戸時代に盛んとなり、薬物にとどまらず広く自然物を対象とするようになった。





問2 傍線部A「民間伝承としての妖怪」とは、どのような存在か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 人間の理解を超えた不可思議な現象に意味を与え日常世界のなかに導き入れる存在。
- ② 通常の認識や予見が無効となる現象をフィクションの領域においてとらえなおす存在。
- ③ 目の前の出来事から予測される未来への不安を意味の体系のなかで認識させる存在。
- ④ 日常的な因果関係にもとづく意味の体系のリアリティを改めて人間に気づかせる存在。
- ⑤ 通常の因果関係の理解では説明のできない意味論的な危機を人間の心に生み出す存在。

問3 傍線部B「アルケオロジー的方法」とは、どのような方法か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① ある時代の文化事象のあいだにある関係性を理解し、その理解にもとづいて考古学の方法に倣い、その時代の事物の客観的な秩序を復元して描き出す方法。
- ② 事物のあいだにある秩序を認識し思考することを可能にしている知の枠組みをとらえ、その枠組みが時代とともに変容するさまを記述する方法。
- ③ さまざまな文化事象を「物」「言葉」「記号」「人間」という要素ごとに分類して整理し直すことで、知の枠組みの変容を描き出す方法。
- ④ 通常区別されているさまざまな文化事象を同じ認識の平面上でとらえることで、ある時代の文化的特徴を社会的な背景を踏まえて分析し記述する方法。
- ⑤ 一見関係のないさまざまな歴史的事象を「物」「言葉」「記号」そして「人間」の関係性に即して接合し、大きな世界史の変動として描き出す方法。

問4 傍線部C「妖怪の『表象』化」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 妖怪が、人工的に作り出されるようになり、神霊による警告を伝える役割を失って、人間が人間を戒めるための道具になったということ。
- ② 妖怪が、神霊の働きを告げる記号から、人間が約束事のなかで作り出す記号になり、架空の存在として楽しむ対象になったということ。
- ③ 妖怪が、伝承や説話といった言葉の世界の存在ではなく視覚的な形象になったことによつて、人間世界に実在するかのように感じられるようになったということ。
- ④ 妖怪が、人間の手で自由自在に作り出されるものになり、人間の力が世界のあらゆる局面や物に及ぶきっかけになったということ。
- ⑤ 妖怪が、神霊からの警告を伝える記号から人間がコントロールする人工的な記号になり、人間の性質を戯画的に形象した娯楽の題材になったということ。

問5 この文章を授業で読んだNさんは、内容をよく理解するために「ノート1」～「ノート3」を作成した。本文の内容とNさんの学習の過程を踏まえて、(i)～(iii)の問いに答えよ。

(i) Nさんは、本文の [1] ～ [18] を「ノート1」のように見出しをつけて整理した。空欄 [I] ・ [II] に入る語句の組合せとして最も適当なものを、後の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は [9] 。

「ノート1」

● 問題設定 ( [1] ) ～ ( [5] )

● 方法論 ( [6] ) ～ ( [9] )

● 日本の妖怪観の変容 ( [10] ) ～ ( [18] )

アルケオロジの説明

中世の妖怪

近世の妖怪

近代の妖怪

[2] [3] [4] [5] [6] [7] [8] [9] [10] [11] [12] [13] [14] [15] [16] [17] [18]

[I] [II]

- ① I 妖怪はいかなる歴史的背景のもとで娯楽の対象になったのかという問い  
 II 意味論的な危機から生み出される妖怪
- ② I 妖怪はいかなる歴史的背景のもとで娯楽の対象になったのかという問い  
 II 妖怪娯楽の具体的事例の紹介
- ③ I 娯楽の対象となった妖怪の説明  
 II いかなる歴史的背景のもとで、どのように妖怪認識が変容したのかという問い
- ④ I 妖怪に対する認識の歴史性  
 II いかなる歴史的背景のもとで、どのように妖怪認識が変容したのかという問い

(ii) Nさんは、本文で述べられている近世から近代への変化を「フート2」のようにまとめた。空欄Ⅲ・Ⅳに入る語句として最も適当なものを、後の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は11。

「フート2」

近世と近代の妖怪観の違いの背景には、「表象」と「人間」との関係の変容があった。近世には、人間によって作り出された、Ⅲが現れた。しかし、近代へ入るとⅣが認識されるようになったことで、近代の妖怪は近世の妖怪にはなかったリアリティを持った存在として現れるようになった。

Ⅲ に入る語句 10

- ① 恐怖を感じさせる形象としての妖怪
- ② 神霊からの言葉を伝える記号としての妖怪
- ③ 視覚的なキャラクターとしての妖怪
- ④ 人を化かすフィクショナルな存在としての妖怪

Ⅳ に入る語句 11

- ① 合理的な思考をする人間
- ② 「私」という自立した人間
- ③ 万物の霊長としての人間
- ④ 不可解な内面をもつ人間

(iii) 「フート2」を作成したNさんは、近代の妖怪観の背景に興味をもった。そこで出典の『江戸の妖怪革命』を読み、「フート3」を作成した。空欄 **V** に入る最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **12**。

(2601-14)

「フート3」

本文の **17** には、近代において「私」が私にとって「不気味なもの」となったということが書かれていた。このことに関係して、本書第四章には、欧米でも近代になってドッペルゲンガーや自己分裂を主題とした小説が数多く発表されたとあり、芥川龍之介の小説「菌車」(一九二七年発表の次の一節が例として引用されていた)。

第二の僕、—— 独逸人の所謂 Doppelgaenger は仕合せにも僕自身に見えたことはなかった。しかし亜米利加の映画俳優になったK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけていた。(僕は突然K君の夫人に「先達はつい御挨拶もしませんで」と言われ、当惑したことを覚えている。)それからもう故人になったある隻脚の翻訳家もやはり銀座のある煙草屋に第二の僕を見かけていた。死はあるいは僕よりも第二の僕に来るのかも知れなかった。

考察 ドッペルゲンガー(Doppelgaenger)とは、ドイツ語で「二重に行く者」、すなわち「分身」の意味であり、もう一人の自分を「見てしまう」怪異のことである。また、「ドッペルゲンガーを見た者は死ぬと言ひ伝えられている」と説明されていた。

**V**

**17** に書かれていた「私」という近代に特有の思想とは、こうした自己意識を踏まえた指摘だったことがわかった。

① 「歯車」の僕は、自分の知らないところで別の僕が行動していることを知った。僕はまだ自分でドッペルゲンガーを見たわけではないと安心し、別の僕の行動によって自分が周囲から承認されているのだと悟った。これは、「私」が他人の認識のなかで生かされているという神秘的な存在であることの例にあたる。

② 「歯車」の僕は、自分には心当たりがない場所で別の僕が目撃されていたと知った。僕は自分でドッペルゲンガーを見たわけではないのでひとまずは安心しながらも、もう一人の自分に死が訪れるのではないかと考えていた。これは、「私」が自分自身を統御できない不安定な存在であることの例にあたる。

③ 「歯車」の僕は、身に覚えのないうちに、会いたいと思っていた人の前に別の僕が姿を現していたと知った。僕は自分でドッペルゲンガーを見たわけではないが、別の僕が自分に代わって思いをかなえてくれたことに驚いた。これは、「私」が未知なる可能性を秘めた存在であることの例にあたる。

④ 「歯車」の僕は、自分がいたはずのない場所に別の僕がいたことを知った。僕は自分でドッペルゲンガーを見たわけではないと自分を落着かせながらも、自分が分身に乗っ取られるかもしれないという不安を感じた。これは、「私」が「私」という分身にコントロールされてしまう不気味な存在であることの例にあたる。

⑤ 「歯車」の僕は、自分がいるはずのない時と場所で僕を見かけたと言われた。僕は今のところ自分でドッペルゲンガーを見たわけではないので死ぬことはないかと安心してはいるが、他人にうわさされることに困惑していた。これは、「私」が自分で自分を制御できない部分を抱えた存在であることの例にあたる。



## 第2問

次の文章は、加能作次郎「羽織と時計」(一九二八年発表の一節である。「私」と同じ出版社で働くW君は、妻子と従妹と暮らしていたが生活は苦しかった。そのW君が病で休職している期間、「私」は何度か彼を訪れ、同僚から集めた見舞金を届けたことがある。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 50)

春になって、陽気がだんだん暖かになると、W君の病気も次第に快くなって、五月の末には、再び出勤することが出来るようになった。

『君の家の紋は何かね?』

彼が久し振りに出勤した最初の日に、W君は突然私に尋ねた。私は不審に思いながら答えた。

5 『円に横モッコです。平凡なありふれた紋です。何ですか?』

『いや、実はね。僕も長い間休んで居て、君に少からぬ世話になったから、ほんのお礼の印に羽二重を一反お上げしようと思っているんだが、同じことなら羽織にでもなるように紋を抜いた方がよいと思っ(注5)てね。どうだね、其方がよ(注3)からうね。』とW君は言った。

10 W君の郷里は羽二重の産地で、彼の親類に織元がある(注4)ので、そこから安く、実費で分けて貰うので、外にも序があるから、そこから直接に京都へ染めにやることにしてあるとのことであった。

『染は京都でなくちや駄目だからね。』とW君は独りで首肯(注5)いて、『じゃ早速言(注6)ってやろう。』

私は辞退する術もなかった。一ヶ月あまり経って、染め上(注7)って来た。W君は自分でそれを持って私の下宿を訪れて呉れた。私は早速W君と連れだ(注8)って、呉服屋へ行(注9)って裏地を買(注10)って羽織に縫(注11)って貰(注12)った。

15 貧乏な私は其時まで礼服というものを一枚も持たなかった。羽二重の紋付の羽織というものを、その時始めて着たのである

が、今でもそれが私の持物の中で最も貴重なもの一つとなつて居る。

『ほんとにいい羽織ですこと、あなたの様な貧乏人が、こんな羽織をもつて居なさるのが不思議な位ですわね。』

妻は、私とその羽織を着る機会のある毎にそう言った。私はW君から貰ったのだということを、妙な羽目からつい(1)言ひはぐれて了つて、今だに妻に打ち明けてないのである。妻が私が結婚の折に特に拵えたものと信じて居るのだ。下に着る着物でも袴でも、その羽織とは全く不調和な粗末なものばかりしか私は持つて居ないので、

『よくそれでも羽織だけ飛び離れていいものをお拵えになりましたわね。』と妻は言うのであった。

『そりゃ礼服だからな。これ一枚あれば下にどんなものを着て居ても、兎に角礼服として何処へでも出られるからな。』私は擦ぐられるような思をしながら、そんなことを言つて誤魔化して居た。

『これで袴だけ仙台平か何かのがあれば揃うのですけれどね。どうかして袴だけいいのをお拵えなさいよ。これじゃ羽織が泣きますわ。こんなぼとぼとしたセルの袴じゃ、折角のいい羽織がちつとも引き立たないじゃありませんか。』

妻はいかにも惜しそうにそう言い言ひした。

私もそうは思わないではないが、今だにその余裕がないのであった。私はこの羽織を着る毎にW君のことを思い出さずに居なかつた。

その後、社に改革があつて、私が雑誌を一人でやることになり、W君は書籍の出版の方に廻ることになった。そして翌年の春、私は他にいい口があつたので、その方へ転ずることになった。

W君は私の将来を祝し、送別会をする代りだといつて、自ら奔走して社の同人達から二十円ばかり醸金をして、私に記念品を贈ることにして呉れた。私は時計を持つて居なかつたので、自分から望んで懐中時計を買つて貰つた。

『贈××君。××社同人。』

こう銀側の蓋の裏に小さく刻まれてあつた。

この処置について、社の同人の中には、内々不平を抱いたものもあつたそうだ。まだ二年足らずしか居ないものに、記念品を

贈るなどということは曾て例のないことで、これはW君が、自分の病氣の際に私が奔走して見舞金を贈ったので、その時の私の厚意に酬いようとする個人的の感情から企てたことだといってW君を非難するものもあつたそうだ。また中には、『あれはW君が自分が罷める時にも、そんな風なことをして貰いたいからだよ。』と卑しい邪推をして皮肉を言ったものもあつたそうだ。

40 私は後でそんなことを耳にして非常に不快を感じた。そしてW君に対して氣の毒でならなかつた。そういう非難を受けてまでも(それはW君自身予想しなかつたことであろうが)私の為に奔走して呉れたW君の厚い情誼を思いやると、私は涙ぐましいほど感謝の念に打たれるのであつた。それと同時に、その一種の恩恵に対して、常に或る重い圧迫を感じざるを得なかつた。

羽織と時計——。私の身についたものの中で最も高価なものが、二つともW君から贈られたものだ。この意識が、今でも私の心に、感謝の念と共に、**B** 何だかやましいような氣恥しいような、訳のわからぬ一種の重苦しい感情を起させるのである。

45 ××社を出てから以後、私は一度もW君と会わなかつた。W君は、その後一年あまりして、病氣が再発して、遂に社を辞し、いくらかの金を融通して来て、電車通りに小さなパン菓子屋を始めたこと、自分は寝たきりで、店は主に従妹が支配して居て、それでやつと生活して居るということなどを、私は或る日途中で××社の人に遇つた時に聞いた。私は××社を辞した後、或る文学雑誌の編輯に携つて、文壇の方と接触する様になり、交友の範囲もおのずから違つて行き、仕事も忙しかつたので、一度見舞旁々訪わねばならぬと思ひながら、自然と遠ざかつて了つた。その中私も結婚をしたり、子が出来たりして、境遇も次第に前と異つて来て、一層(ウ)足が遠くなつた。偶々思ひ出しても、久しく無沙汰をして居ただけそれだけ、そしてそれに対して一種の自責を感じずれば感ずるほど、妙に改まつた氣持になつて、つい億劫になるのであつた。

55 羽織と時計——併し本当を言えば、この二つが、W君と私とを遠ざけたようなものであつた。これがなかつたなら、私はもつと素直な自由な氣持になつて、時々W君を訪れることが出来たであろうと、今になつて思われる。何故というに、私はこの二個の物品を持つて居るので、常にW君から恩惠的債務を負うて居るように感ぜられたからである。この債務に対する自意識は、私

をして不思議にW君の家の敷居を高く思わせた。而も不思議なことに、C 私はW君よりも、彼の妻君の眼を恐れた。私が時計を帯にはさんで行くとする、『あの時計は、良人が世話して進げたのだ。』斯う妻君の眼が言う。私が羽織を着て行く、『あああの羽織は、良人が進げたのだ。』斯う妻君の眼が言う。もし二つとも身につけて行かないならば、『あの人は羽織や時計をどうしただろう。』斯う妻君の眼が言うように空想されるのであった。どうしてそんな考が起るのか分らない。或は私自身の中に、そういう卑しい邪推深い性情がある為であろう。が、いつでもW君を訪れようと思いつく毎に、妙にその厭な考が私を引き止めるのであった。そればかりではない、こうして無沙汰を続ければ続けるほど、私はW君の妻君に対して更に恐れを抱くのであった。『〇〇さんの方は随分薄情な方ね、あれきり一度も来なさらぬ。こうして貴郎が病気で寝て居らっしゃるのを知らないんでしようか、見舞に一度も来て下さらない。』

65 斯う彼女が彼女の良人に向つて私を責めて居そうである。その言葉には、あんなに、羽織や時計などを進げたりして、こちらでは尽すだけのことは尽してあるのに、という意味を、彼女は含めて居るのである。

60 そんなことを思うと逆も行く気にはなれなかつた。こちらから出て行つて、妻君のそういう考をなくする様に努めるよりも、私は逃げよう逃げようとした。私は何か偶然の機会に妻君なり従妹なりと、途中ででも遇わんことを願つた。そうしたら、『W君はお変わりありませんか、相変らず元気で××社へ行つていらつしやいますか？』としらばくれて尋ねる、すると、疾うに社をやめ、病気で寝て居ると、相手の人は答えるに違いない。

70 『おやおや！一寸も知りませんでした。それはいけませんね。どうぞよろしく言つて下さい。近いうちに御見舞に上りますから。』

75 こう言つて分れよう。そしてそれから二三日置いて、何か手土産を、そつだ、かなり立派なものを持って見舞に行こう、そうするとそれから後は、心易く往来出来るだろう――。

75 時に、D 私は少し遠廻りして、W君の家の前を通り、原っぱで子供に食べさせるのだからと妻に命じて、態と其の店に飽パン

を買わせたが、実はその折陰ながら家の様子を窺い、うまく行けば、全く偶然の様に、妻君なり従妹なりに遇おうという微かな期待をもつて居たためであつた。私は電車の線路を挟んで向側の人道に立つて店の様子をそれとなく注視して居たが、出て来た人は、妻君でも従妹でもなく、全く見知らぬ、下女の様な女だつた。<sup>(注12)</sup> 私は若しや家が間違つては居ないか、または代が變つても居るのではないかと、屋根看板をよく注意して見たが、以前××社の人から聞いたと同じく、××堂W——とあつた。たしかにW君の店に相違なかつた。それ以来、私はまだ一度も其店の前を通つたこともなかつた。

(注) 1 紋——家、氏族のしるしとして定まつている図柄。

2 円に横モッコ——紋の図案の一つ。

3 羽二重——上質な絹織物。つやがあり、肌ざわりがいい。

4 一反——布類の長さの単位。長さ一〇メートル幅三六センチ以上が一反の規格で、成人一人分の着物となる。

5 紋を抜いた——「紋の図柄を染め抜いた」という意味。

6 仙台平——袴に用いる高級絹織物の一種。

7 セル——和服用の毛織物の一種。

8 同人——仲間。

9 醜金——何かをするために金銭を出し合うこと。

10 情誼——人につきあう上での人情や情愛。

11 良人——夫。

12 下女——雑事をさせるために雇つた女性のこと。当時の呼称。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 13 ～ 15。

(ア) 術もなかった

13

- ① 理由もなかった  
 ② 手立てもなかった  
 ③ 義理もなかった  
 ④ 気持ちもなかった  
 ⑤ はずもなかった

(イ) 言いはぐれて

14

- ① 言う必要を感じないで  
 ② 言う機会を逃して  
 ③ 言うのを忘れて  
 ④ 言う気になれなくて  
 ⑤ 言うべきでないと思って

(ウ) 足が遠くなった

15

- ① 訪れることがなくなった  
 ② 時間がかかるようになった  
 ③ 会う理由がなくなった  
 ④ 行き来が不便になった  
 ⑤ 思い出さなくなった

問2 傍線部A「揶ぐられるような思」とあるが、それはどのような気持ちか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 自分たちの結婚に際して羽織を新調したと思いついで発言している妻に対する、笑い出したような気持ち。
- ② 上等な羽織を持っていることを自慢に思いつつ、妻に事実を知られた場合を想像して、不安になっている気持ち。
- ③ 妻に羽織をほめられたうれしさと、本当のことを告げていない後ろめたさが入り混じった、落ち着かない気持ち。
- ④ 妻が自分の服装に関心を寄せてくれることをうれしく感じつつも、羽織だけほめることを物足りなく思う気持ち。
- ⑤ 羽織はW君からもらったものだと妻に打ち明けてみたい衝動と、自分を侮っている妻への不満とがせめぎ合う気持ち。

問3 傍線部B「何だかやましいような気恥しいような、訳のわからぬ一種の重苦しい感情」とあるが、それはどういうことか。

その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

(2601—23)

- ① W君が手を尽くして贈ってくれた品物は、いずれも自分には到底釣り合わないほど立派なものに思え、自分を厚遇しようとするW君の熱意を過剰なものに感じてとまどっている。
- ② W君の見繕ってくれた羽織はもちろん、自ら希望した時計にも実はさしたる必要を感じていなかったのに、W君がその贈り物をするために評判を落としたことを、申し訳なくももったいなくも感じている。
- ③ W君が羽織を贈ってくれたことに味をしめ、続いて時計までも希望し、高価な品々をやすやすと手に入れてしまった欲の深さを恥じており、W君へ向けられた批判をそのまま自分にも向けられたものと受け取っている。
- ④ 立派な羽織と時計とによって一人前の体裁を取り繕うことができたものの、それらを自分の力では手に入れられなかったことを情けなく感じており、W君の厚意にも自分へ向けられた哀れみを感じ取っている。
- ⑤ 頼んだわけでもないのに自分のために奔走してくれるW君に対する周囲の批判を耳にするたびに、W君に対する申し訳なさを感じたが、同時にその厚意には見返りを期待する底意をも察知している。



問4 傍線部C「私はW君よりも、彼の妻君の眼を恐れた」とあるが、「私」が「妻君の眼」を気にするのはなぜか。その説明として

最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 「私」に厚意をもって接してくれたW君が退社後に寝たきりで生活苦に陥っていることを考えると、見舞に駆けつけなくてはいけないと思う一方で、「私」の転職後はW君と久しく疎遠になってしまい、その間看病を続けた妻君に自分の冷たさを責められるのではないかと悩んでいるから。

② W君が退社した後慣れないパン菓子屋を始めるほど家計が苦しくなったことを知り、「私」が彼の恩義に酬いる番だと思う一方で、転職後にさほど家計も潤わずW君を経済的に助けられないことを考えると、W君を家庭で支える妻君には申し訳ないことをしていると感じているから。

③ 退職後に病で苦勞しているW君のことを思うと、「私」に対するW君の恩義は一生忘れてはいけないと思う一方で、忙しい日常生活にかまけてW君のことをつい忘れてしまうふがいなさを感じたまま見舞に出かけると、妻君に偽善的な態度を指摘されるのではないかとという怖さを感じているから。

④ 自分を友人として信頼し苦しい状況にあつて頼りにもしているだろうW君のことを想像すると、見舞に行きたいという気持ちが募る一方で、かつてW君の示した厚意に酬いていないことを内心やましく思わざるを得ず、妻君の前では卑屈にへりくだらねばならないことを疎ましくも感じているから。

⑤ W君が「私」を立派な人間と評価してくれたことに感謝の気持ちを持っているため、W君の窮状を救いたいという思いが募る一方で、自分だけが幸せになっているのにW君を訪れなかったことを反省すればするほど、苦勞する妻君には顔を合わせられないと悩んでいるから。

問5 傍線部D「私は少し遠廻りして、W君の家の前を通り、原っぱで子供に食べさせるのだからと妻に命じて、態と其の店に

餡パンを買わせた」とあるが、この「私」の行動の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答

番号は 19。

- ① W君の家族に対する罪悪感を募らせるあまり、自分たち家族の暮らし向きが好転したさまを見せることがためらわれて、かつてのような質素な生活を演出しようとする振る舞いに及んでいる。
- ② W君と疎遠になってしまった後悔にさいなまれてはいるものの、それを妻に率直に打ち明け相談することも今更できず、逆にその悩みを悟られまいとして妻にまで虚勢を張るはめになっている。
- ③ 家族を犠牲にしてまで自分を厚遇してくれたW君に酬いるためのふさわしい方法がわからず、せめて店で買い物をすることによって、かつての厚意に少しでも応えることができると考えている。
- ④ W君の家族との間柄がこじれてしまったことが気がかりでならず、どうにかしてその誤解を解こうとして稚拙な振る舞いに及ぶばかりか、身勝手な思いに事情を知らない自分の家族まで付き合い合せている。
- ⑤ 偶然を装わなければW君と会えないとまで思っていたが、これまで事情を誤魔化してきたために、今更妻に本当のことを打ち明けることもできず、回りくどいやり方で様子を窺う機会を作ろうとしている。

問6 次に示す「資料」は、この文章（加能作次郎「羽織と時計」）が発表された当時、新聞紙上に掲載された批評（評者は宮島新三郎、原文の仮名遣いを改めてある）の一部である。これを踏まえた上で、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料】

今までの氏は生活の種々相を様々な方面から多角的に描破して、其処から或るものを浮き上らせようとした点があつたし、又そうすることに依つて作品の効果を強大にするという長所を示していたように思う。見た儘、有りの儘を刻明に描写する——其処に氏の有する大きな強味がある。由来氏はライフの一点だけを覗つて作をするというような所謂『小話』作家の面影は有つていなかった。

それが『羽織と時計』になると、作者が本当の泣き笑いの悲痛な人生を描こうとしたものか、それとも単に羽織と時計に伴う思い出を中心にして、ある一つの興味ある覗いを、否一つのおちを物語つてもやろうとしたのか分らない程謂う所の小話臭味の多過ぎた嫌がある。若し此作品から小話臭味を取去つたら、即ち羽織と時計とに作者が関心し過ぎなかつたら、そして飽くまでも『私』の見たW君の生活、W君の病氣、それに伴う陰鬱な、悲惨な境遇を如実に描いたなら、一層感銘の深い作品になつたらうと思われる。羽織と時計とに執し過ぎたことは、この作品をユーモラスなものにする助けとはなつたが、作品の効果を増す力にはなつて居ない。私は寧ろ忠実なる生活の再現者としての加能氏に多くの尊敬を払っている。

宮島新三郎「師走文壇の一瞥」(『時事新報』一九一八年二月七日)

(注) 1 描破——あまざず描きつくすこと。

2 由来——元来、もともと。

3 執し過ぎた——「執着し過ぎた」という意味。

(i) 【資料】の二重傍線部に「羽織と時計」とに執し過ぎたことは、この作品をユーモラスなものにする助けとはなったが、作品の効果を増す力にはなつて居ない。」とあるが、それはどのようなことか。評者の意見の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① 多くの挿話からW君の姿を浮かび上がらせようとして、W君の描き方に予期せぬぶれが生じている。
- ② 実際の出来事を忠実に再現しようとして意識しすぎた結果、W君の悲痛な思いに寄り添えていない。
- ③ 強い印象を残した思い出の品への愛着が強かったために、W君の一面だけを取り上げ美化している。
- ④ 挿話の巧みなまとまりにこだわったため、W君の生活や境遇の描き方が断片的なものになっている。

(ii) 【資料】の評者が着目する「羽織と時計」は、表題に用いられるほかに、「羽織と時計」という表現として本文中にも用いられている(43行目、53行目)。この繰り返しに注目し、評者とは異なる見解を提示した内容として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- ① 「羽織と時計」という表現がそれぞれ異なる状況において自問自答のように繰り返されることで、かつてのようにはW君を信頼できなくなっていく「私」の動揺が描かれることを重視すべきだ。
- ② 複雑な人間関係に耐えられず生活の破綻を招いてしまったW君のつたなさが、「羽織と時計」という余韻を含んだ表現で哀惜の思いをこめて回顧されていることを重視すべきだ。
- ③ 「私」の境遇の変化にかかわらず繰り返し用いられる「羽織と時計」という表現が、好意をもって接していた「私」に必死で応えようとするW君の思いの純粹さを想起させることを重視すべきだ。
- ④ 「羽織と時計」という表現の繰り返しによって、W君の厚意が皮肉にも自分をかえって遠ざけることになった経緯について、「私」が切ない心中を吐露していることを重視すべきだ。

### 第3問

次の文章は、『榮花物語』の一節である。藤原長家(本文では「中納言殿」)の妻が亡くなり、親族らが亡骸をゆかりの寺(法住寺)に移す場面から始まっている。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。(配点 50)

大北の方も、この殿ばらも、またおしかへし臥しまろばせたまふ。これをだに悲しくゆゆしきことにははでは、また何ごとをかはと見えたり。さて御車の後に、大納言殿、中納言殿、さるべき人々は歩ませたまふ。いへばおろかにて、(ア)えまねびやらず。北の方の御車や、女房たちの車などひき続けたり。御供の人々など数知らず多かり。法住寺には、常の御渡りにも似ぬ御車などのさまに、僧都の君、御目もくれて、え見たてまつりたまはず。さて御車かきおろして、つぎて人々おりぬ。

さてこの御忌のほどは、誰もそこにおはしますべきなりけり。山の方をながめやらせたまふにつけても、わざとならず色々にすこしうつろひたり。鹿の鳴く音に御目もさめて、今すこし心細さまさりたまふ。宮々よりも思し慰むべき御消息たびたびあれど、ただ今はただ夢を見たらんやうにのみ思されて過ぎたまふ。月のいみじう明きにも、思し残させたまふことなし。内裏わたりの女房も、さまざま御消息聞こゆれども、よろしきほどは、A「今みづから」とばかり書かせたまふ。進内侍と聞こゆる人、聞こえたり。

契りけん千代は涙の水底に枕ばかりや浮きて見ゆらん  
中納言殿の御返し、

起き臥しの契りはたえて尽きせねば枕を浮くる涙なりけり

また東宮の若宮の御乳母の小弁、

X 悲しさをかつは思ひも慰めよ誰もつひにはとまるべき世か

御返し、

Y 慰むる方しなければ世の中の常なきことも知られざりけり

かやうに思しのためはせても、いでや、もののおぼゆるにこそあめれ、まして月ごろ、年ごろにもならば、思ひ忘るるやうもやあらんと、われながら心憂く思さる。何ごとにもいかでかくと(イ)めやすくおはせしものを、顔かたちよりはじめ、心ざま、手うち書き、絵などの心に入り、さいつころまで御心に入りて、うつ伏しうつ伏して描きたまひしものを、この夏の絵を、枇杷殿びは殿にもてまゐりたりしかば、いみじう興じめさせたまひて、納めたまひし、**B**よくぞもてまゐりにけるなど、思し残すことなきままに、よろづにつけて恋しくのみ思ひ出できこえさせたまふ。年ごろ書き集つめさせたまひける絵物語など、(注7)みな焼けにし後、去年こぞ、今年のほどにし集めさせたまへるもいみじう多かりし、(ウ)里に出でなば、とり出でつつ見て慰めむと思されけり。

(注) 1 この殿はら——故人と縁故のあつた人々。

2 御車——亡骸を運ぶ車。

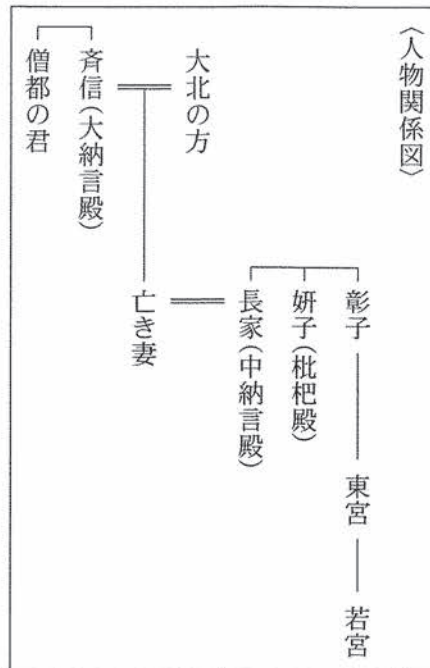
3 大納言殿——藤原斉信。長家の妻の父。

4 北の方——「大北の方」と同一人物。

5 僧都の君——斉信の弟で、法住寺の僧。

6 宮々——長家の姉たち。彰子や妍子(枇杷殿)ら。

7 みな焼けにし後——数年前の火事ですべて燃えてしまった後。



問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

22  
 24

(ア) えまねびやらす

22

- ① 信じてあげることができない
- ② かつて経験したことがない
- ③ とても真似まねのしようがない
- ④ 表現しつくすことはできない
- ⑤ 決して忘れることはできない

(イ) めやすくおはせしものを

23

- ① すばらしい人柄だったのになあ
- ② すこやかに過ごしていらしたのになあ
- ③ 感じのよい人でいらつしやつたのになあ
- ④ 見た目のすぐれた人であつたのになあ
- ⑤ 上手におできになつたのになあ

(ウ) 里に出でなば

24

- ① 自邸に戻つたときには
- ② 旧都に引越した日には
- ③ 山里に隠棲いんせいするつもりなので
- ④ 妻の実家から立ち去るので
- ⑤ 故郷に帰るとすぐに

問2 傍線部A「今みづから」とばかり書かせたまふ」とあるが、長家がそのような対応をしたのはなぜか。その理由の説明とし

て最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 並一通りの関わりしかない人からのおくやみの手紙に対してまで、丁寧な返事をする心の余裕がなかったから。
- ② 妻と仲のよかった女房たちには、この悲しみが自然と薄れるまでは返事を待つてほしいと伝えたかったから。
- ③ 心のこもったおくやみの手紙に対しては、表現を十分練つて返事をする必要がある、少し待つてほしかったから。
- ④ 見舞客の対応で忙しかったが、いくらか時間ができた時には、ほんの一言ならば返事を書くことができたから。
- ⑤ 大切な相手からのおくやみの手紙に対しては、すぐに自らお礼の挨拶にうかがわなければならないと考えたから。



問3

傍線部B「よくぞもてまゐりにけるなど、思し残すことなきままに、よろづにつけて恋しくのみ思ひ出できこえさせたまふ」の語句や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

26。

① 「よくぞ……ける」は、妻の描いた絵を枇杷殿へ献上していたことを振り返って、そうしておいてよかったと、長家がしみじみと感じていることを表している。

② 「思し残すことなき」は、妻とともに過ごした日々には後悔はないという長家の気持ちを表している。

③ 「ままに」は「それでもやはり」という意味で、長家が妻の死を受け入れたつもりでも、なお悲しみを払拭することができずに苦悩していることを表している。

④ 「よろづにつけて」は、妻の描いた絵物語のすべてが焼失してしまったことに対する長家の悲しみを強調している。

⑤ 「思ひ出できこえさせたまふ」の「させ」は使役の意味で、ともに亡き妻のことを懐かしんでほしいと、長家が枇杷殿に強く訴えていることを表している。

問4 この文章の登場人物についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

- ① 親族たちが悲しみのあまりに取り乱している中で、「大北の方」だけは冷静さを保って人々に指示を与えていた。
- ② 「僧都の君」は涙があふれて長家の妻の亡骸を直視できないほどであったが、気丈に振る舞い亡骸を車から降ろした。
- ③ 長家は秋の終わりの寂しい風景を目にするたびに、妻を亡くしたことが夢であってくればよいと思っていた。
- ④ 「進内侍」は長家の妻が亡くなったことを深く悲しみ、自分も枕が浮くほど涙を流していると嘆く歌を贈った。
- ⑤ 長家の亡き妻は容貌もすばらしく、字が上手なことに加え、絵にもたいそう関心が深く生前は熱心に描いていた。

問5 次に示す「文章」を読み、その内容を踏まえて、X・Y・Zの三首の和歌についての説明として適当なものを、後の①、

⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

28

29

〔文章〕

『栄花物語』の和歌Xと同じ歌は、『千載和歌集』にも記されている。妻を失って悲しむ長家のもとへ届けられたという状況も同一である。しかし、『千載和歌集』では、それに対する長家の返歌は、

Z 誰もみなとまるべきにはあらねども後るるほどはなほぞ悲しき

となっており、同じ和歌Xに対する返歌の表現や内容が、『千載和歌集』の和歌Zと『栄花物語』の和歌Yとは異なる。『栄花物語』では、和歌X・Yのやりとりを経て、長家が内省を深めてゆく様子が描かれている。

- ① 和歌Xは、妻を失った長家の悲しみを深くは理解していない、ありきたりなおくやみの歌であり、「悲しみをきっぱり忘れなさい」と安易に言ってしまった部分に、その誠意のなさが露呈してしまっている。
- ② 和歌Xが、世の中は無常で誰しも永遠に生きることにはできないということを詠んでいるのに対して、和歌Zはその内容をあえて肯定することで、妻に先立たれてしまった悲しみをなんとか慰めようとしている。
- ③ 和歌Xが、誰でもいつかは必ず死ぬ身なのだからと言って長家を慰めようとしているのに対して、和歌Zはひとまずそれに同意を示したうえで、それでも妻を亡くした今は悲しくてならないと訴えている。
- ④ 和歌Zが、「誰も」とまるべき「悲し」など和歌Xと同じ言葉を用いることで、悲しみを癒やしてくれたことへの感謝を表現しているのに対して、和歌Yはそれらを用いないことで、和歌Xの励ましを拒む姿勢を表明している。
- ⑤ 和歌Yは、長家を励まそうとした和歌Xに対して私の心を癒やすことのできる人などいないと反発した歌であり、長家が他人の干渉をわずらわしく思い、亡き妻との思い出の世界に閉じこもってゆくという文脈につながっている。
- ⑥ 和歌Yは、世の無常のことなど今は考えられないと詠んだ歌だが、そう詠んだことでかえってこの世の無常を意識してしまった長家が、いつかは妻への思いも薄れてゆくのではないかと恐れ、妻を深く追慕してゆく契機となっている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第4問

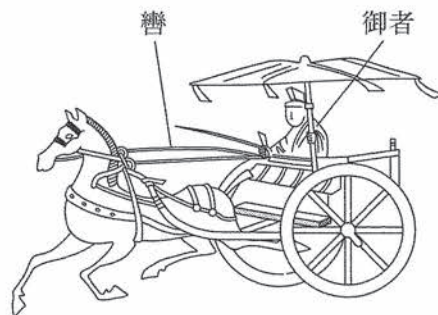
次の「問題文Ⅰ」の詩と「問題文Ⅱ」の文章は、いずれも馬車を操縦する「御術」(ぎよじゆつ)について書かれたものである。これらを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。(配点 50)

【問題文Ⅰ】

吾 <sub>ニ</sub> 有 <sub>リ</sub> 千里 <sub>ノ</sub> 馬 <sub>一</sub>	毛 <sub>(注1)</sub> 骨 <sub>(1)</sub> 何 <sub>ニ</sub> 蕭 <sub>(注2)</sub> 森 <sub>一</sub>
疾 <sub>(はやく)</sub> 馳 <sub>(はす)</sub> 如 <sub>ク</sub> 奔 <sub>ル</sub> 風 <sub>一</sub>	白 <sub>ニ</sub> 日 <sub>一</sub> 無 <sub>シ</sub> 留 <sub>ル</sub> 陰 <sub>ヲ</sub>
徐 <sub>(おもむ)</sub> 驅 <sub>(か)</sub> 當 <sub>リ</sub> 大 <sub>ニ</sub> 道 <sub>一</sub>	步 <sub>(注3)</sub> 驟 <sub>(しう)</sub> 中 <sub>(注4)</sub> 五 <sub>ニ</sub> 音 <sub>一</sub>
馬 <sub>ニ</sub> 雖 <sub>(も)</sub> 有 <sub>リ</sub> 四 <sub>ノ</sub> 足 <sub>一</sub>	遲 <sub>ハ</sub> 速 <sub>ハ</sub> 在 <sub>リ</sub> 吾 <sub>ガ</sub> <b>X</b>
六 <sub>(注5)</sub> 轡 <sub>(ひ)</sub> 応 <sub>(じ)</sub> 吾 <sub>ガ</sub> 手 <sub>ニ</sub>	調 <sub>(スル)</sub> 和 <sub>(コト)</sub> 如 <sub>(シ)</sub> 瑟 <sub>(注6)</sub> 琴 <sub>一</sub>
東 <sub>ト</sub> 西 <sub>ト</sub> 与 <sub>ニ</sub> 南 <sub>ト</sub> 北 <sub>ト</sub>	高 <sub>コ</sub> 下 <sub>ス</sub> 山 <sub>ト</sub> 与 <sub>レ</sub> 林 <sub>ト</sub>
惟 <sub>(注7)</sub> 意 <sub>(シ)</sub> 所 <sub>(ニ)</sub> 欲 <sub>(ス)</sub> 適 <sub>(ス)</sub>	九 <sub>(注7)</sub> 州 <sub>(シ)</sub> 可 <sub>(シ)</sub> 周 <sub>(ス)</sub> 尋 <sub>(ス)</sub>
至 <sub>(注8)</sub> 哉 <sub>(ナ)</sub> 人 <sub>ト</sub> 与 <sub>レ</sub> 馬 <sub>一</sub>	両 <sub>ニ</sub> 樂 <sub>一</sub> 不 <sub>シ</sub> 相 <sub>シ</sub> 侵 <sub>ム</sub>

(注)

- 1 毛骨——馬の毛なみと骨格。
- 2 蕭森——ひきしまつて美しい。
- 3 步驟——馬が駆ける音。
- 4 五音——中国の伝統的な音階。
- 5 六轡——馬車を操る手綱。
- 6 瑟琴——大きな琴と小さな琴。



馬車を走らせる御者

伯樂(注8) 識シル其ノ外ヲ 徒(ア)知ル其ノ價ナ千金ナルヲ

王良ハ得タリ其ノ性ヲ 此ノ術(イ)固ク已ニ深シ

良馬ハ須マツ善(注9)馭ギョ 吾ガ言ハ可シ為ス箴(注10)

7 九州——中国全土。

8 伯樂——良馬を見抜く名人。

9 善馭——すぐれた御者(前ページの図を参照)。

馭は御に同じ。

10 箴——いましめ。

(歐陽脩『歐陽文忠公集』による)

【問題文Ⅱ】

王良は趙国(ちやうこく)の襄主(じやうしゆ)に仕える臣であり、「御術」における師でもある。ある日、襄主が王良に馬車の駆け競べを挑み、三回競走して三回とも勝てなかった。くやしがる襄主が、まだ「御術」のすべてを教えていないのではないかと詰め寄ると、王良は次のように答えた。

凡ソ御之所ハ貴ブ馬(a)体ニ安シ于ニ車ニ人(b)心ニ調カ于ニ馬ニ而シ後ニ可シ以テ進ム速(c)

致ス遠(c)今君後則欲速臣先則恐速于臣。夫誘道争遠非先

則後也。而先後心在于臣。尚何以调于馬。此君之所以後

也。

(『韓非子』による)

問1 波線部(ア)「徒」・(イ)「固」のここでの意味と、最も近い意味を持つ漢字はどれか。次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は  ・  。

(イ)

<input type="text" value="31"/>	「固」			
-----				
⑤	④	③	②	①
本	絶	必	難	強

(ア)

<input type="text" value="30"/>	「徒」			
-----				
⑤	④	③	②	①
猶	好	当	復	只

問2 波線部①「何」・②「周」・③「至哉」のここでの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 32 ～ 34。

- (1) 「何」 32
- ① どころ  
② いつから  
③ どのように  
④ どうして  
⑤ なんと

- (2) 「周」 33
- ① 手あたり次第に  
② 何度も繰り返し  
③ あらゆるところに  
④ きちんと準備して  
⑤ はるか遠くより

- (3) 「至哉」 34
- ① あのような遠くまで行くことができるものなのか  
② こんなにも人の気持ち理解できるものなのか  
③ あのような高い山まで登ることができようか  
④ このような境地にまで到達できるものなのか  
⑤ こんなにも速く走ることができるだろうか



問3

【問題文Ⅰ】の傍線部A「馬雖有<sub>レ</sub>四足<sub>一</sub>遅速在<sub>レ</sub>吾<sub>一</sub>」には「御術」の要点を述べている。【問題文Ⅰ」と【問題文Ⅱ】を踏まえれば、【問題文Ⅰ】の空欄Xには【問題文Ⅱ】の二重傍線部(a)と(e)のいずれかが入る。空欄Xに入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は35。

- |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ⑤   | ④   | ③   | ②   | ①   |
| (e) | (d) | (c) | (b) | (a) |
| 臣   | 先   | 進   | 心   | 体   |

問4 傍線部B「惟意所欲適」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- |   |       |                 |
|---|-------|-----------------|
| ① | 惟意所欲適 | 惟だ意の欲して適ふ所にして   |
| ② | 惟意所欲適 | 惟だ意ふ所に適はんと欲して   |
| ③ | 惟意所欲適 | 惟だ欲する所を意ひ適きて    |
| ④ | 惟意所欲適 | 惟だ意の適かんと欲する所にして |
| ⑤ | 惟意所欲適 | 惟だ欲して適く所を意ひて    |

問5 傍線部C「今君後則欲速<sub>レ</sub>臣、先則恐<sub>レ</sub>速<sub>ニ</sub>于<sub>レ</sub>臣。」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ

選べ。解答番号は 37。

- ① あなたは私に後ろにつかれると馬車の操縦に集中するのに、私が前に出るとすぐにやる気を失ってしまいました。
- ② あなたは今回後れても追いつこうとしましたが、以前は私に及ばないのではないかと不安にかられるだけでした。
- ③ あなたはいつも馬車のことを後回しにして、どの馬も私の馬より劣っているのではないかと憂えるばかりでした。
- ④ あなたは後から追い抜くことを考えていましたが、私は最初から追いつかれないように気をつけていました。
- ⑤ あなたは私に後れると追いつくことだけを考え、前に出るといつ追いつかれるかと心配ばかりしていました。

問6 「問題文Ⅰ」と「問題文Ⅱ」を踏まえた「御術」と御者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は

38

- ① 「御術」においては、馬を手厚く養うだけでなく、よい馬車を選ぶことも大切である。王良のように車の手入れを念にしなければ、馬を快適に走らせることのできる御者にはなれない。
- ② 「御術」においては、馬の心のうちをくみとり、馬車を遠くまで走らせることが大切である。王良のように馬の体調を考えながら鍛えなければ、千里の馬を育てる御者にはなれない。
- ③ 「御術」においては、すぐれた馬を選ぶだけでなく、馬と一体となつて走ることが大切である。襄主のように他のことに気をとられていては、馬を自在に走らせる御者にはなれない。
- ④ 「御術」においては、馬を厳しく育て、巧みな駆け引きを会得することが大切である。王良のように常に勝負の場を意識しながら馬を育てなければ、競走に勝つことのできる御者にはなれない。
- ⑤ 「御術」においては、訓練場だけでなく、山と林を駆けまわつて手綱さばきを磨くことも大切である。襄主のように型通りの練習をおこなうだけでは、素晴らしい御者にはなれない。